

コリント人への手紙第一 第12章 4節

「さて、賜物にはいろいろの種類がありますが、御霊は同じ御霊です。」

人それぞれに取り得がある。それが自前のものではなく、与えられた能力である。与えられた能力を自分なりに磨きをかけて、さらに能力を高めることは期待されている。それにしても、根っこの部分は与えられたものである。だから、賜物といわれる。

この賜物のひとつとして、ものの見方、見え方、視点があげられる。見る先には、見る者の関心が反映される。ある者はアートに魅了され、ある者は世界の困窮に目を向け、ある者はスポーツの世界に目を向ける。それぞれが見る世界に身を乗り出し、緩やかな関心を持つ者もいたり、見えた世界に献身する者が出たり、またその世界に入り込んでゆくこともある。賜物を生きる決断をすることもある。賜物が人生を左右する。

人それぞれの視点が与えられたもの、賜物と自覚する者の人生は幸いである。与えられたことを高め、用い、人生の実を収穫する楽しみがある。この賜物、視点は変化するかもしれない。しかし、見ている当事者は変わらず見ている。そして、視点を絶え間なく与える賜物の提供者がいる。それが、御霊である。このお方が賜物を用いる者の根本視点となり、いつもいっしょにおられる。御霊体験の場が賜物。

2022年2月5日